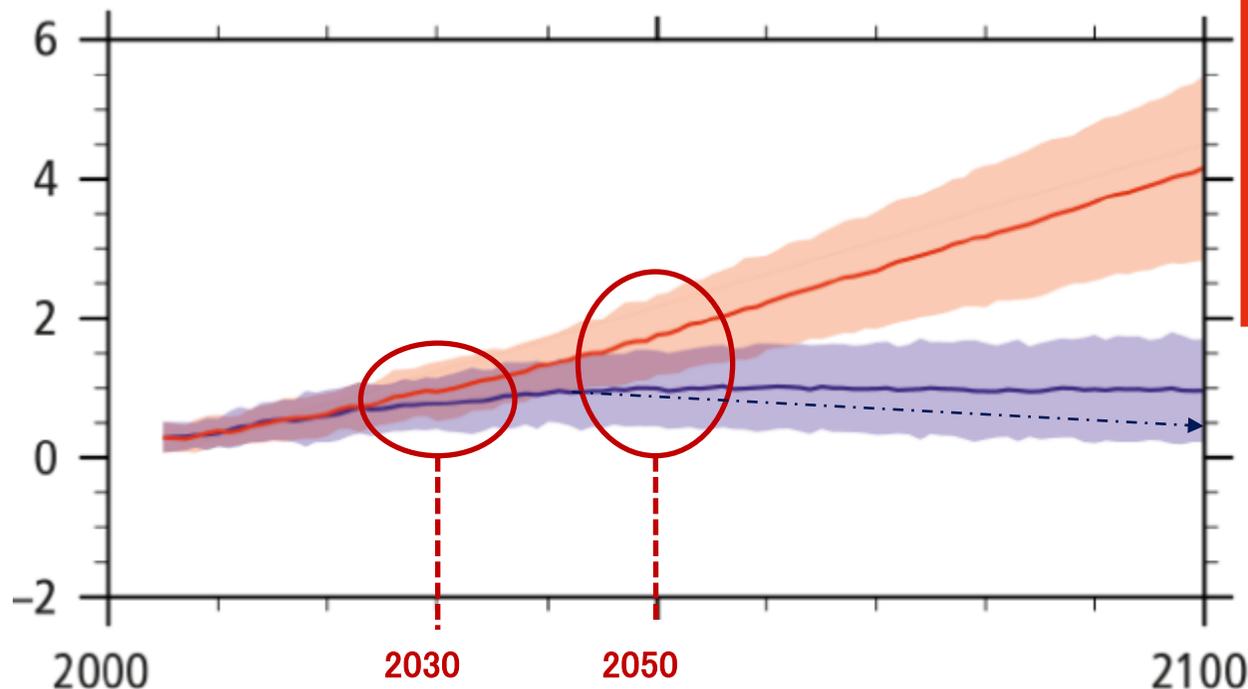


【選択シナリオ】

2050年時点における1.5°Cと4°C (2.6°C~4°C)シナリオを想定

【世界平均地上気温変化予測】 (1986~2005年平均との差)



- ✓ 2030年までには、2°C、4°C (2.6°C~4°C)シナリオではほぼ同様な気温変化が発生し、2030年以降シナリオ間の差が拡大
- ✓ シナリオ分析で選択した時間軸ごとに、2050年の脱炭素を見据えた適切なトランジション(移行)のパスを描くことが重要

4°C (2.6°C~)シナリオとして定義

4°Cシナリオ :

現状を上回る温暖化対策をとらなければ、産業革命時期比で3.2~5.4°C上昇

2°C以上 (2.6°C~4°C)シナリオ :

現状を上回る温暖化対策をとらなければ、産業革命時期比で2.7~4.0°C上昇

2°Cシナリオ :

厳しい対策をとれば、産業革命時期比で0.9~2.3°C上昇

1.5°Cシナリオ :

抜本的なシステム移行が達成された場合、高い確率で産業革命時期比で1.5°C未満の上昇

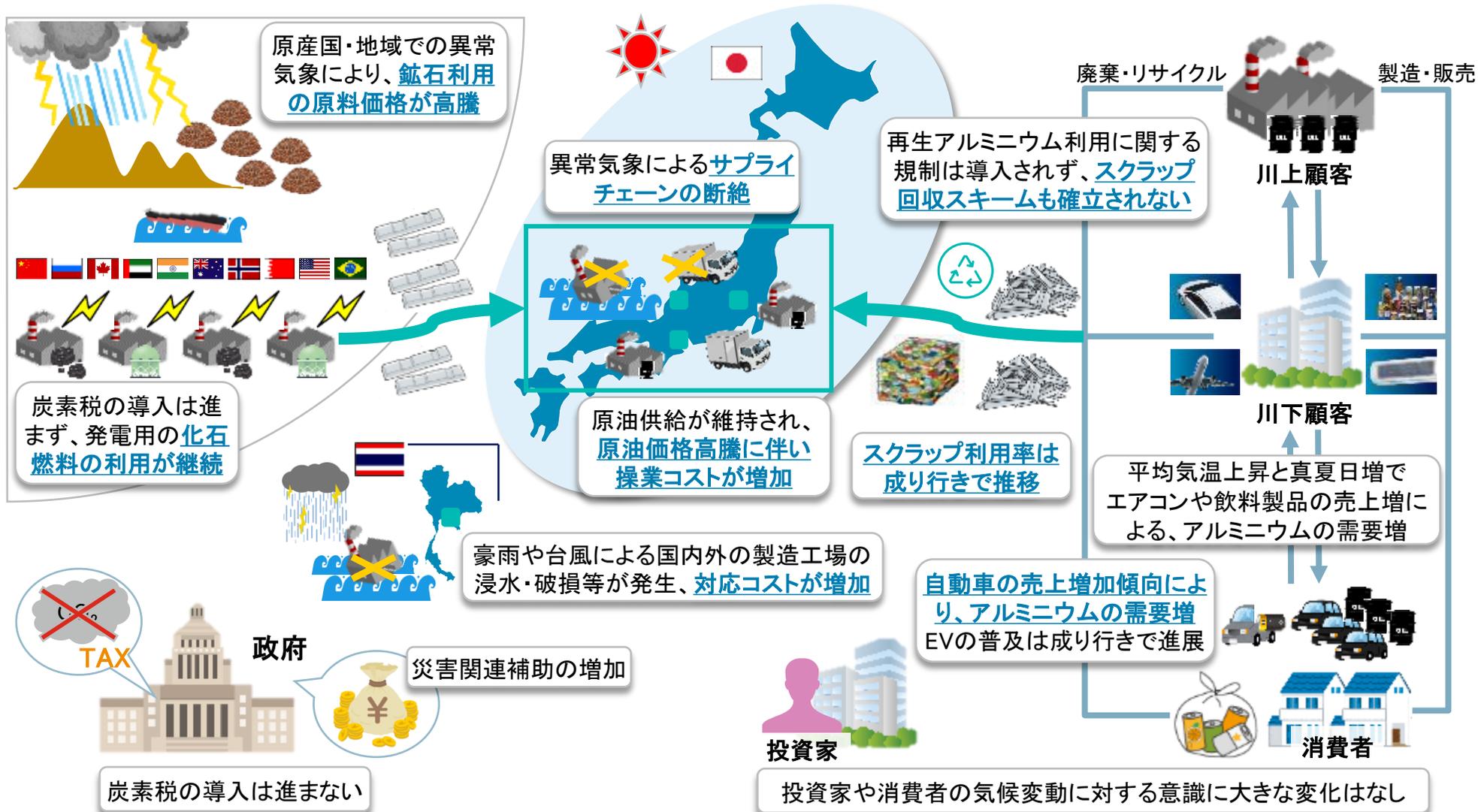
TCFD提言でのシナリオ分析では2°C以下を含む複数の温度帯シナリオの選択を示唆

【4°C(2.6~4°C)シナリオの将来社会像イメージ】

再生材利用は増加せず、アルミニウムの需要推移は成り行き、異常気象への対策が重要となる。

一次アルミニウム(新地金)調達

再生アルミニウム(再生地金)調達

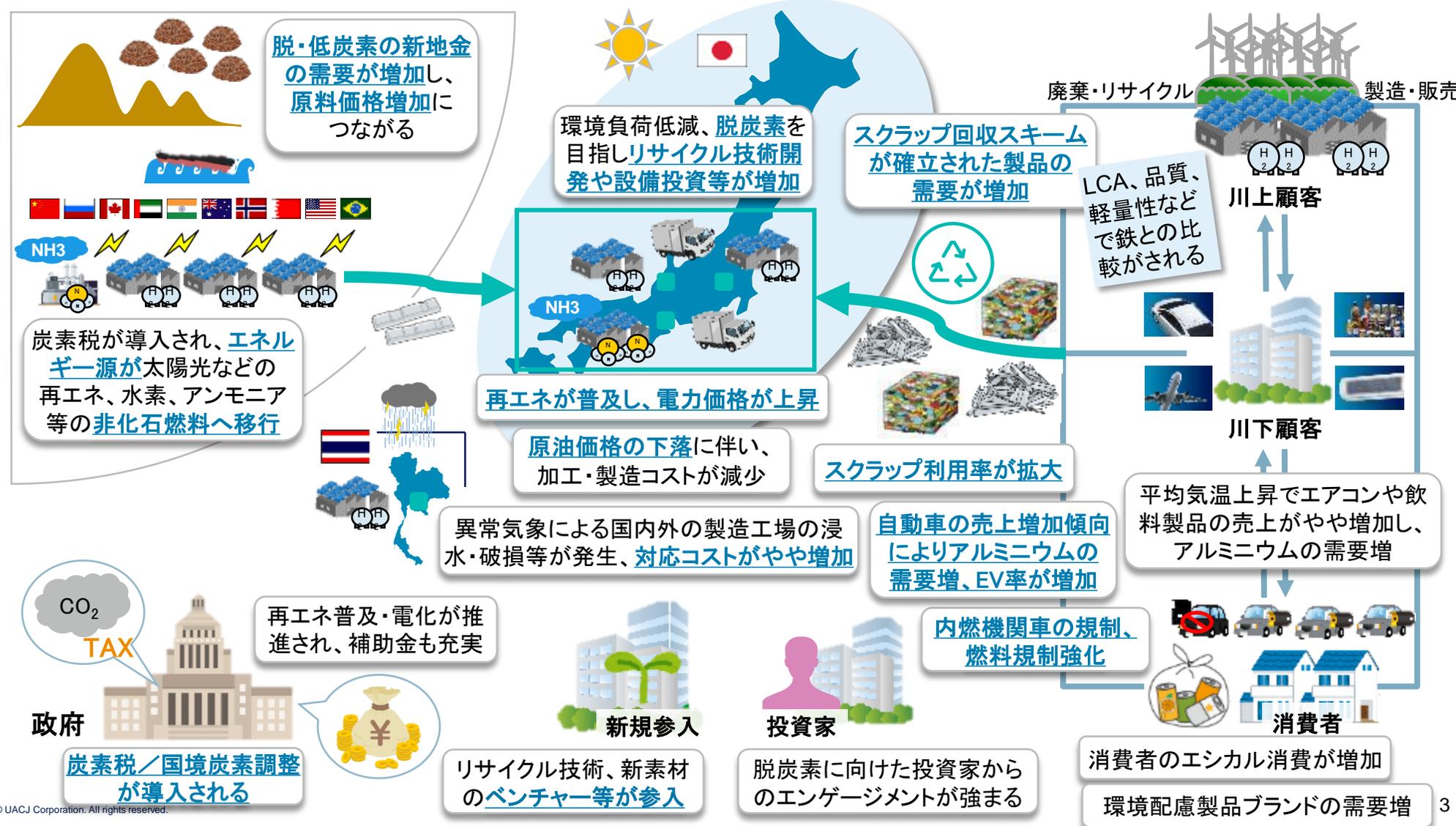


【1.5°Cシナリオの将来社会像イメージ】

再エネ・再生材へのシフト。スクラップ回収スキームの構築と低炭素製品の研究開発が重要となる。

一次アルミニウム(新地金)調達

再生アルミニウム(再生地金)調達



今後のシナリオ分析の全社展開・成熟度向上

今後のアクション	アクションの詳細
シナリオ分析の 全社展開	<ul style="list-style-type: none">✓ 今回のシナリオ分析では対象を板事業と国内およびタイ拠点に絞った。 <u>今回の手法を展開し、グループ全体でのシナリオ分析を実施する</u>✓ 本プロジェクトチームをコアとして<u>タスクフォースやワーキンググループ等</u>を設置して、<u>グループ全体、各業務層に展開する。</u>
モニタリング・ 実行体制	<ul style="list-style-type: none">✓ 今回は2パターンのシナリオを設定した。気候変動の不確実性は高く、どういった将来が予想されるかを<u>定期的にウォッチし、影響評価を行い、戦略を見直す。</u>✓ 気候変動リスクへの取り組みは今回はPJとしてチーム組成したが、一時的な取組としないためにも、<u>正式な組織ロールとして組み込む。</u>
成熟度の向上	<ul style="list-style-type: none">✓ 今回実施した取り組みはあくまでシナリオ分析の「レベル1」のため、今後レベル2,3に向け、<u>成熟度を段階的に高める。</u>